

松本清張記念館

◆館報◆

2019.3
第60号

「鬼塚球磨子、つづめるとオニクマです」



「それが先入観念の見本のようなものだ。裁判はどこまでも冷静に審理をすすめる。あらゆる先入観念はいつさい排除してね。ぼくも冷静に、科学的な立場で弁護するよ」

『疑惑』昭和57（1982）年 東京創元社

『疑惑』は、昭和57（1982）年「オール讀物」2月号に掲載された。
原題「昇る足音」。

現在入手できる本：『疑惑』文春文庫

作品紹介

北陸の財産家・白河福太郎と、妻・球磨子が乗った車が、新港湾の埠頭岸壁から海に飛び込んだ。夫に三億円の保険金が掛けられていたことから、助かった妻・球磨子による殺害が疑われた。

裁判が始まる前から、地元、北陸日日新聞の社会部記者・秋谷茂一は、球磨子の犯行と決めつけ、彼女の過去を誇張した記事を連載し「女鬼クマ」毒婦」と書き立てた。

弁護を請け負った原山正雄は、自身の病気と年齢を考え、東京の大物弁護士・岡村謙孝に共同弁護を依頼する。秋谷は、裁判のなりゆきを追いかけながら、球磨子が無罪になった場合の報復について、怖れを感じ始めた。しかし岡村は弁護を断り、原山も病のため弁護を辞任する。秋谷の心は明るくなった。

裁判を開廷するためには国選弁護人が必要であった。これに選ばれた佐原卓吉は、秋谷の予想を裏切り、法廷で健闘する。先入観から形成された状況証拠を次々と覆し、ついに無罪の物的証拠を掴もうとする佐原。正常な神経を失った秋谷は……

映画化、ドラマ化で有名な『疑惑』だが、原作と映像ではかなり異なる。ジャーナリズムや司法に対して示唆に富んだ作品。

（学芸員 柳原暁子）

目次

松本清張研究会第39回研究発表会……………	2
20周年記念フォトグラフィ……………	4
20周年企画 あふれる想いを……………	5
ドラマ上映会のお知らせ……………	5
展示品紹介……………	6
点描 作品の舞台を訪ねて……………	6
『松本清張研究』第20号発刊……………	7
友の会活動報告……………	7
トビックス……………	8

講演

松本清張の冷戦体制

— アジアの「黒い霧」の構造を描く



成田 龍一
日本女子大学教授

はじめに 清張文学の魅力

私の専門は歴史学ですが、清張の膨大な作品の中には歴史を題材にしたものが多くあり、最近では清張を歴史学の研究対象としようとする動きもあります。しかし私はそれ以上に、松本清張という人間が日本の社会や政治に対して、同時代的に深く鋭く目を光らせていたところに関心を持っています。

私が多量の清張作品に共通する魅力として感じるのには、ある事件を掘り下げていくうちに、だんだんと人間関係や社会の構造が明らかになっていき、そして表面からだけでは見えなかった深層や闇にまでたどり着くということです。さらには出来事の後にある文化や民俗・風習、そして歴史の重層性があることで、ある一定の秩序が保たれた、現在へと至る過程を浮き彫りにする点です。つまり清張は、社会を構造的に把握する、そして、物事が折り重なっていくプロセスを解明する、という二つの作法を持っていたと言えます。一般的に歴史家はこの構造型と過程型の二つのタイプのどちらかに分けられませんが、清張にはその両方の性質が備わっていたわけですから、

清張は、歴史家がなかなか手を出しにくい同時代史的な視点をもいち早く取り入れているのです。端的に述べるならば、清張は戦後を「歴史」として取り扱った先駆けであったわけです。松本清張がこうした様々な視点から見えてくる内容を小説世界の中で描いたことに対して、私は歴史家として大変感銘を受けています。

清張が描いた冷戦体制

これまでも清張作品に関して数多くの論評や研究が積み重ねられてきましたが、特に初期と最晩年の作品に関心が集中しているように感じます。そこで私は今回、1960年代から70年代を経て、80年代中頃までの作品に着目しました。清張が『日本の黒い霧』や『昭和史発掘』といったノンフィクションの分野に入り込みつつ、小説も書き続けた時期にあたります。そしてちょうど冷戦体制の新たな展開や本格的な高度経済成長の時期でもあります。つまりこれらの作品には、高度経済成長⇨冷戦期の政治や社会、人々の心のありようが、清張の視点から描かれているのです。ここからは、作品群を執筆時期によって大きく三つにわけ、それぞれの世界情勢等と照らし合わせながら見ていきたいと思います。

○1960年代前半

清張は1960年の『日本の黒い霧』で占領下の日本で起きた様々な事件を取り上げ、そこに占領軍の謀略や権力構造を明らかにしていきました。このことは現在でこそふつうに語られますが、当時としては大変思い切った叙述であったと思います。清張はまだ人々の記憶に生々しく、しかも見バラバラに感じられる出来事を、連のまとまり、すなわち歴史像としてまとめ上げながら記述することで、占領下の構造や時代認識を読者に提示したのです。そこから保守支配や利権の

構造、そしてそれらが絡みあっていることが暴露され、政界・官界の腐敗や汚職のしくみが明らかになっていきました。

さらにこの頃の清張は、占領期だけでなくそれに前後するアジア・太平洋戦争や朝鮮戦争を重ね合わせながら捉え、関心を日本から東アジアへと拡大していきます。朝鮮半島を舞台とした小説「北の詩人」では登場人物の生涯の背後に戦時中やアメリカの影が描かれるなど、同時期のフィクション作品にも、清張のそうした大胆な視点や発想が反映されています。

○1970年前後

こうした清張の認識も1970年前後になると新たな展開を迎え、東南アジアにまで範囲が広がっていきますが、その背景には激化するベトナム戦争があったようです。推理小説「象の白い脚」や「熱い絹」の舞台となるのはいずれも東南アジア諸国ですが、そこでもベトナム戦争とアメリカCIAの黒い影、そして現地の政界における汚職と腐敗の構造、いわばアジアの黒い霧が描かれています。さらにそこには、高度経済成長期のただ中にある日本が東南アジアへ向けるまなざしや、現地に残る旧日本軍の痕跡といったものまでもが織り込まれており、物語は大変重層的なものになっています。

もちろん清張はこの時期にも、日本国内を舞台とした小説を数多く書いています。それらの作品からも、日本における腐敗や汚職の構造は高度経済成長のさなかでも依然として続いていること、それがさらに国際的な広がりをもっていること、清張の鋭い洞察を読みとることが出来ます。

○1980年代中葉まで

その後、1970年代の終わり頃から80年代中葉にかけて清張が描いたのは、高度経済成長を経た日本が、国際的な関係の中で新たな「黒い霧」を自ら生み出していく様相です。実在の国際企業破綻をモデルにした「空の城」や、イランでの清張自身の経験が執筆の契機となった「白と黒の革命」、そしてスイス銀行の内幕を描いた「聖獣配列」やパチカンの宗教・金融界がからむ「霧の会議」など、この時期には作品の舞台も世界各地へと広がっていきます。

また同時期の国内を舞台とした小説をみて、裏社会の生態や企業内の権力抗争、総裁選をめぐる政党の内情や建設業界の談合など、経済大国となった日本にはびこる問題をテーマとした作品が目立ちます。

まとめ

以上のとおり、時期ごとに清張作品の特徴や推移をみてきましたが、あらゆる清張作品には一貫して認められる大きな特徴があります。それは、私的な動機つまり個人の意識が公的な構造つまり社会の仕組みの中で踏みつぶされたが故に事件や犯罪に至ってしまうという流れです。個人の怒りも多くの人々に共有されれば、やがて社会の「公憤」として運動化されていくでしょうが、清張はそこに行き着く以前の段階を描いたのです。



このように、冷戦体制と高度経済成長の時代を通じて世界の「黒い霧」を描き続けた清張は、その背後に様々な形で存在するアメリカの影、そしてアジア・太平洋戦争から続く戦時の残滓といったものを剔出し、そうした歴史の折り重なりの上に現在の社会と秩序が成り立っている構造を私たちに示しています。現代の私たちが清張作品を読み返し、その視点を学ぶことで、今この時代に漂っている「黒い霧」がよりはっきりと見えてくはずですよ。

研究発表

松本清張、未完の仕事

『荒木光子の戦後史』

—『マッカーサー元帥レポート』を中心に—



北原 恵
大阪大学教授

要旨

松本清張は最晩年、小説のテーマとして日本再軍備計画に取り組もうとし、米軍占領下の日本で活躍した荒木光子（1902-1986）に関心を持っていた。

本研究はほとんど先行研究のない荒木光子の1940～50年代の活動に焦点を当て、関係史料の収集・分析を通じて占領軍や旧軍参謀らとのつながりを解明することで、新たな歴史像を見出すとともに、清張の未完に終わった仕事の一端を解明しようとするものである。

光子は戦前のドイツ留学等を経て戦時中もナチ高官やゾルゲとも親交があり、敗戦後は夫で元東大教授の荒木光太郎や旧軍関係者らとともにGHQ参謀第二部（G2）の日本側スタッフとして『マッカーサー元帥レポート』編纂に従事した人物である。日米双方の関係者の証言によると、彼女はその海外経験や語学力、社交的な性格などからG2部長であるウィロビー少将の信頼を得て、レポートに掲載する日本側の戦争画等の資料収集を一手に任せられ莫大な経費を獲得するとともに、絶大な権力を持ってレポート編纂に関わっていたとされる。さらにはその背後で進められていたウィロビーによる朝鮮

戦争への旧軍参謀の利用、そして旧軍参謀らによる日本の再軍備計画にも彼女が深く関係していたことも窺われるが、この時期の彼女について日本国内にはほとんど記録がないため、未だ多くの謎に包まれている。

先般渡米して現地で保管されている資料を調査したところ、光子に関する記録がいくつか見つかった。アメリカ公文書館（NARA II）に残るレポート作成時の校正や図版といった資料の中に、収録された戦争画はいずれもミセスアラキの指示によつて集められた旨のメモが含まれていたほか、GHQ向けに開催された戦争画の展覧会図録には光子の署名による序文が掲載されていた。またメリーランド大学ホーンベイク図書館（Gordon W. Prange Papers）では光子を含むG2日本人スタッフの名簿が確認できた。これらの文書資料は、前述した光子の戦争画収集活動を裏付けるものである。加えて同コレクションには、光子から米側の編纂責任者ブランゲ博士に宛てた私信も何通が残っており、その内容からは両名がかなり親密な間柄であったことが読みとられる。つまりこれは彼女がアメリカ側にも強い影響力を持っていたことを示唆する資料の一つだと言える。

清張が執筆に向け1990年頃から日本の再軍備計画に関する調査を進めるなかで、当初は旧陸軍参謀の辻正信や服部卓四郎に興味を持っていたことや、光子の甥である弁護士と面会し聞き取りを行っていたこと、そして病に斃れる直前には「まもなく執筆に着手するが光子は実名で登場させる旨を編集部に告げていたことなどが、これまでに担当編集者の回顧などから明らかになっていた。しかし本研究のため今回新たに寄せられた編集者メモからは、清張の関心が次第に旧軍人から光子へと移っていく経過や、最終的な作品の構想はウィロビーが率いた「戦史資料室」（参謀第二部）を舞台とするものであったことなどが読みとられる。一方、記念館に残る清張手持ちの光子関連資料を確認したところ、いずれも一般的に入手可能なものであり、分量も多くはなかった。

今後とも存命関係者への聞き取りや荒木光太郎関連文書の調査、渡米して得た資料の分析等、研究を継続し成果としてまとめたい。



寄附金贈呈式



過去の功績への市長感謝状贈呈

「清張オマージュ展」オープニング



▲みうらじゅん氏来館

「松本清張『砂の器』展」オープニング



▲島田陽子氏来館



20年の軌跡展

20周年記念 フォトグラフィ



西工大とのコラボ事業



横山秀夫氏講演会



◀春田和秀氏 & 樋口尚文氏

清張サロン
「砂の器」子役 春田和秀氏
トークタイム



◀内山聖子氏&浅野妙子氏



「砂の器」シネマ・コンサート



トークショー
「TVプロデューサーと脚本家が語る清張ドラマの世界」



あふれる想いを… 8

今回は、松本清張記念館友の会会長で元朝日新聞社記者の小林慎也さんです。
朝日新聞の企画で松本清張にインタビューしたときの思い出を書いていただきました。

『私の会った清張さん』



松本清張記念館友の会
会長 **小林 慎也 氏**

私が初めて松本清張さんにお会いしたのは、昭和56年春だった。
当時、朝日新聞西部版(九州、山口)の夕刊に連載していた管内の著名人や出身者の半生を紹介する「人物シリーズ」という企画が始まっていた。
最初は、政治家や経済人が多かったが、文化人にも広げることになり、学芸部から候補を出すことになった。文化面ではまず文芸、そして北九州市出身の『松本清張』の名が挙がった。ただ、超の字がつく売れっ子作家。果たして、取材する時間がとってもらえるか。先輩で清張を知る記者がいて、とにかく、福岡市に来た時に交渉した。一日だけ(午後)ならOKが出て、約40年の「小倉時代」を中心に私が書くことになった。上京して、午後の4、5時間、テープをとりながらインタビューした。「何でも自由に書いて下さい。」と、質問にはすべて答えてくれた。4、5時間分をテープにおさめた。外からの電話も来客も一切なかった。(取りつがなかったらしい。)帰り道で足を引きづった記憶がある。緊張していたのだろう。

「小倉時代の松本清張」の題で、23回連載した。掲載誌は毎日送った。奥さんが切り抜いて保存していたらしい。

23回連載して終わった。小説からではうかがえない、清張さんの実像が少しでも読者に伝わればという思いだったが、自信はない。ただ、ご本人からクレームが来なかったのではとほっとした。

連載が終わりかけたころ、電話があり、「大分に来ている。来ないか」とのこと。とくに用事があったわけではないが、料亭で昼食をご馳走になった。連載最終回の写真は、そこで撮ることができた。

連載が終わって、ご自宅に御礼にうかがった。記事については、全くふれなかったが、昔いっしょだった朝日の記者や社員のことを「どうしてるか」と聞かれた。

多くの方はすでに退職している。私には、清張さんの故郷小倉への優しい思いが、言葉のはしばしに感じとれた。この時、清張さんは71歳だった。



連載記事のコピー 第一回(左)と最終回

20周年記念企画として始めたこの連載も今回が最後となります。
ご協力して下さった皆様、ありがとうございました。

松本清張原作ドラマ 上映会のお知らせ

過去にNHKから寄贈をうけたドラマ5作品を上映いたします。
松本清張本人が出演している1970年代に放映されたNHK土曜ドラマです。

- 日 程** 2019年4月27日(土)~5月6日(月)
- 上演時間** 10:30~/14:00~ 1日2回同じ作品を上映します。
- 会 場** 松本清張記念館 地階 企画展示室

※上映会だけの参加の場合、入場無料となります。事前申込不要。上映作品については、直接お問合せください。



ゴールデンウィークには
ぜひ記念館へ!!

「或る『小倉日記』伝」

まず初めに言っておくと、今回紹介する「或る『小倉日記』伝」の直筆原稿は、当館が現物を所蔵しているわけではない。展示しているのは、開館以来ずっとレプリカである。

なぜ、清張の代表作の直筆原稿が、松本清張記念館に無いのか？それならどこにあるのだ？と思った方もおられよう。実は、東京・駒場の日本近代文学館に収蔵されている。

一九六七年に開館した日本近代文学館は、わが国において文学館の草分けでもある。当然ながら、松本清張記念館が開館するずっと以前から、資料の収集等を行ってきた。一九七五年、「芥川賞・直木賞四十年記念展」を開催した折に、文藝春秋社を通して受賞作と選評原稿がまとめて寄贈された。「或る『小倉日記』伝」の直筆原稿（「文藝春秋」掲載にあたり書かれたもの）もその中に含まれていた。清張の原稿が、芥川賞作品として保管されていること、少なくとも散逸せずに残ったことは喜ばしい。

これを契機として、芥川・直木賞作品の原稿は日本近代文学館に納められるようになる。そこで気になるのが、ワープロで原稿を書く作家が増えてこのかた、この慣例は

どうなっているのかということだった。同館に問い合わせると「お願い状とともに原稿用紙をお渡しして冒頭浄書のご寄贈をお願いしています。」とのこと。つまり、原稿用紙一枚分だけ、受賞作の冒頭を書いていただくということだった。こうして現在も受賞作の原稿が収集され続けている。

繰り返しになるが、「或る『小倉日記』伝」の直筆原稿は、当館が現物を所蔵しているわけではない。なのに、展示品紹介で取り上げるのは少々厚かましいかもしれない。加えて誤解を生む可能性もある。しかし、以上のような背景を明らかにしておくほうが、有意義ではないだろうか、そう思い立った次第である。

（学芸員 柳原暁子）



「或る『小倉日記』伝」の直筆原稿

点描 作品の舞台を訪ねて 「時間の習俗」③ — 鐘崎

前回（第57号）、峰岡の行動について「寒い最中に四十分もじっとしていられるのか」と疑問をなげたが、三原警部補は簡単に峰岡の話の嘘だと看破し、峰岡は定期券売り場で誰かに定期券を買って与えたのではないかと考える。それが相模湖畔で消えた女性なのではと見当をつけて探るものの、峰岡の周辺に特定の女性の名はあがってこない。三原警部補があせるなか、福岡で次の事件が起こる。太宰府近くの水城で若い男性の絞殺死体が見つかり、その死亡推定日時に、福岡にいる鳥飼刑事が反応する。相模湖での事件に関連があるかもしれないと思いついた三原警部補に連絡をとる。

三原は、被害者には気の毒だが、この第二の殺人事件の勃発によってその捜査進展に期待した。（中略）水城の事件が相模湖畔の事件に関連があるという推定は、鳥飼とまったく同じ考えだ。

（文藝春秋「松本清張全集1」時間の習俗より）

しかしいくら捜査しても、なかなか水城の事件と相模湖畔の事件の共通点はあがってこない。あせる三原警部補だったが、水城の現場に落ちていたあるものから、小さな糸口を見つける。そして、鳥飼刑事が上京し捜査は佳境に入っていく。

ここから先はトリックについてふれることになるため、詳細は控えるが、捜査のカギとなるのは、俳句の吟行であり、吟行を行っ



織幡神社

た鐘崎であった。

鐘崎は、福岡の東北から遠賀川の河口に至る線が、玄界灘に向かつてふくれあがっている中央あたりにあった。

「（前略）吟行のあった所は、山が海岸に迫っているところで、その山には織幡神社というのがある、その鳥居が山裾に立っています。」

（文藝春秋「松本清張全集1」時間の習俗より）

宗像市にある鐘崎の織幡神社に行ってみた。小説のとおり、山裾に織幡神社の鳥居が立ち、鳥居のすぐ近くに海岸線があった。宗像市のホームページによると、天気の良い日には、ここから、2017年に世界遺産登録された「神宿る島」といわれる「沖ノ島」を望むことができるという。残念ながら「沖ノ島」を見ることはかなわなかったけれど、早春の玄界灘は真つ青でキラキラしていた。

「時間の習俗」は、三原警部補と鳥飼刑事が二人で列車に乗っている場面が終わる。

「鳥飼さん、今度は私が自分で行きますよ。○○（※）を引取りにね。あなたもいっしょに行きませんか？」

「そりや喜んで行きますよ。」

成田線の列車の内には、畑から吹く風が溢れこんでいる。「それにしても、○○が土肥を殺す動機ですが……」

と、鳥飼は二等車の椅子に掛けて、向かい側の三原に言った。

（中略）

列車が走るにつれて、広い平野に麦の熟れがすすんでいた。

（文藝春秋「松本清張全集1」時間の習俗より）

のどかな景色の中を走る列車と、事件が解決してホットとした二人の表情が見えるような読後感のいいエンディングに、先日みた玄界灘のキラキラした風景が重なった。

（檜垣一美）

※1 犯人の名前なので、未読の方のために、ここでは伏字とする。

研究誌「松本清張研究」〈第二十号発刊〉

特集 清張と地理

対談

「清張ジオグラフィック

— 作品が語る歴史と風土 —

今尾恵介・原武史

論文

松本清張一九八〇年代日本に逆らう

——「海外もの」長篇小説の意義

高橋敏夫

旅が物語を創造する——時刻表と地図と

綾目広治

清張作品に描かれた中近東の地理風土

大津忠彦

山かげの遠い日々——清張と山陰

赤塚隆二

清張と筑豊——松本清張の地理的理解(一)

中川里志

投稿

『両像・森鷗外』私考(二)

——「鷗外と乃木にみる明治の精神に関する

松本清張の疑問と考察——

多田康廣

池河連小説攷——『北の詩人』林和の妻について

鴻農映二

記念館研究ノート

若き日の「詩」と「詩情」

——エドガー・アラン・ポーと松本清張

柳原暁子

記念館だより

編集後記

友の会 活動報告

● 清張サロン

清張サロンは毎回、清張作品や清張に関する話題をテーマに、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流を目的に開催しています。第2回清張サロンは、特別企画展「松本清張『砂の器』展」の小野芳美学芸員による解説と、映画『砂の器』で、子役として少年時代の本浦秀夫を演じられた春田和秀さんのトークを行いました。トークの聞き手は、映画監督・映画評論家として活躍されている樋口尚文さんでした。

春田さんは、16歳の時に俳優を引退し、現在は自動車関係のお仕事をされていますが、日本各地を10か月にわたり巡ったロケのこぼれ話や共演者との思い出などを語り、春田さんの誠実なお人柄と、樋口さんの春田さんに対するリスペクトが伺える、大変暖かなトークとなりました。

第2回 1月26日(土) 15:00～16:30 参加者91名

- 会場：生涯学習総合センター 3階ホール
- テーマ：～展示と映画で探る～『砂の器』魅力再発見
- 講師：第1部 小野 芳美 学芸員
第2部 春田 和秀氏(元俳優・映画『砂の器』に出演)
樋口 尚文氏(映画監督・映画評論家)



● 生誕祭

平成30年12月7日(金) 14:30～16:30 参加者52名
松本清張記念館・企画展示室

松本清張さんの109回目の誕生日を、友の会会員でお祝いする「生誕祭」を開催しました。今回は、長崎外国語大学教授の加島巧さんに「松本清張は『砂の器』をどう書いたのか—事件発生から紙吹雪の女まで—」というテーマで講演いただいた後、友の会の小林慎也会長と一緒に、中央に置かれたケーキに立てた109の数字のローソクを吹き消していただきました。

各テーブルに配られたケーキとコーヒーで、歓談の輪も拡がり、会員同士の交流も深まった生誕祭でした。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。
年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL.093-582-2761



2019年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親しんでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始まりました。
新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

■ **応募対象** 全国の中学生・高校生

■ **課題図書** 中学生・高校生ともに下記から1作品

「**眼の壁**」(『眼の壁』新潮文庫)

「**陸行水行**」(『陸行水行』文春文庫)

「**或る『小倉日記』伝**」(『或る『小倉日記』伝』新潮文庫、角川文庫)

■ **応募方法**

○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしません。必要な人はコピーをおとりください。

■ **応募締切** 2019年9月30日(月) ※当日消印有効

■ **選考** 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■ **発表**

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表する予定です。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ **賞** (受賞人数等変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

■後援 西日本新聞社 ●協力 モンブランジャパン

応募先
問い合わせ

〒803-0813 北九州市小倉北区内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303 ※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

講演に行ってきました

平成30年度下半期の講演実績です。

日付	主催者・会場等	日付	主催者・会場等
10/4	藤松市民センター	1/22	観光案内ボランティア若戸ブロック
10/18	清水市民センター	1/26	北九州文学サロン
11/10	生涯学習課	2/1	穴生学舎
11/10	八幡西図書館	2/8	穴生学舎
12/26	北九州大学	2/13	引野市民センター
1/10	やまびこの会	3/13	観光ボランティア 小倉地区会
1/19	北九州文学サロン	3/23	香椎公民館

特別展

「巨星・松本清張」展

2019/3/16～5/12

県立神奈川近代文学館で開催中。
松本清張記念館は、資料貸与等で協力しています。

●編集後記●

また桜の季節が巡ってきました。改修工事で休館していた小倉城がリニューアルオープンし、いつにもましてにぎやかな記念館周辺です。4月1日から入館料が600円になりましたが、3館チケットは700円のまま据え置きとなっています。ぜひ、リニューアルした小倉城や小倉城庭園といっしょに、松本清張記念館をご観覧ください。5頁にも書いてありますが、ゴールデンウィークにはドラマ上映会も行います。みなさまのお越しをお待ちしています。(K.H)



編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)ハーティブレーン



イラスト:山藤 章二

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円)
小学生/240円(190円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくとう便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

